

18. 虫よけ・鳥追い

苗代や畑に種を蒔くと籾殻などで覆って鳥のついでむのを防ぐという話はよく聞く。夏以降、メイチュウやイナゴ、スズメの害をどう防ぐかは古くからの課題であった。

虫除けの護摩の灰

7月頃、箕面の龍安寺で護摩の灰をもらってくる。タケノカワ(筍皮)に包んで竹の先を割って差して、田に挿しておく、虫が来ない(千里丘)。

シラホヌキ

8月末から9月初めの二百十日かけて、シラホヌキ(白穂抜き)をした。ネムシ(二化メイチュウ)がつくとシラホになる。シラホは鎌で下から切る。村で買い取って焼く。小学生が二化メイチュウの卵とりをした。お金がもらえた(千里丘)。

カカシその後

害鳥よけにも変化があった。昔はスズメオドシやカガシ、そのあと糸を張る、さらに網を張る、と変わってきた(千里丘)。

ウンカの防除

ウンカの害を受けると、そこだけが1ヶ所白くなる。ひと晩で変わるほど早かった。ウンカの害は毎年ではない。流行の年があった。

昔は田面に石油を落として、稲を棒で叩いてウンカを落とす。石油は竹の筒に穴をあけて落とす。田に水を入れると油とともにウンカも流すことができた(千里丘)。

油流しは江戸時代から

田の水面に油を流してウンカを退治するというのは、江戸時代からの技術である。

A B C は大蔵永常の『除蝗録』(1862)から。イナゴ・ウンカ・メイチュウなど害虫退治の専門書で、鯨の油を竹筒に入れて田に流し、箒や笹・椀などで稲の葉に油をかけ、なおよじ登ってくる虫は細竹のムチではたき落とす方法を述べている。

鯨の油が使われるようになったのは、南紀の太地や土佐の捕鯨業が盛んになったことが背景にある。大蔵永常は鯨図鑑のように大小何種もの鯨の図を何頁にもわたって載せ、鯨油の質を論じるという徹底ぶり。江戸時代の科学はハイテク日本の源流といえよう。

農薬の出現

ホリドールといういい薬が出てきた。かかっただけでも中毒するというきつい薬。

不注意に使ってどこそこのおじいさんが亡くなった。犠牲者が出て、やがて使用禁止になった(千里丘)。

